

ラノベと私とラブコメ
と。

厨学式年生症候群

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

友人に恋愛の相談をしたら奉仕部に！ 果たして彼女の恋の行方は！ ちよと変わったラブコメディここに開幕！

目次

1話	相談	1
第2話	思い出	9
第3話	待ち合わせ	14

1話 相談

「ねえ結衣」

「ん？ どうしたの？ エノシン」

私はこの総武高校で仲良くなった友人の由比ヶ浜結衣に私はソワソワと緊張しながら話しかける。

ちなみにエノシンは結衣が勝手につけたアダ名で私の本名は江ノ島 海と言う、言っておくが超高校級とか関係はない、軍人とかギャルな姉妹は身内にはいないので間違えないでね。

「うん、実は中学の時から好きな人がいてね」

「え、なになに！ それでどうしたの」

「あ、うん……まあその人はちよつと話しづらい事情があつて……その出来れば付き合いたいなあとか……」

「そっかあ……よし分かったよ！ それじゃあ付いてきて！」

「え？ あ、ちよつと」

結衣はそう言つて私の手を掴む。

そして強引に引つ張られた私は、やむを得ずついて行つた。

そして、私と由比は特別棟の空き教室についた。

由比は躊躇わず空き教室の扉を開く。

「やつはろー!」

「こんにちは、由比ヶ浜さん」

部屋の中には黒髪の美少女がいた。

私はそんな彼女を見て思わず驚きのあまりに絶句する。

それもそのはず、何故ならこの人は総武高校学年1位の成績を持ちまた容姿端麗と

言つた人物、雪ノ下雪乃その人なのだから。

そんな雪ノ下さんは、私に気づいたのか私の方をに視線を向けるとすぐ様結衣の方を見る。

「ところで由比ヶ浜さんその人は?」

「あ、えっと」

「うん、何か悩んでる見たいだから連れて来たの!」

私がい淀んでいると、結衣はあつけらかなと答える。

あ、えっとこれはどうしたらいいのでしょうか……もうなるようにしかならない気もし

ますが……

そして気が付けば、私は椅子に座り雪ノ下さんと由比ヶ浜さんそして何故かいる比企谷さんの前に座っている。

「え、とその……」

えつと……どうしましょう私は正直どうしたらいいのかわからなくなる。

すると、突然比企谷さんが立ち上がります。

「あゝ悪い何か飲み物買って来るわ」

「そう……それじゃあ野菜生活イチゴヨーグルトで」

「あ、私はカフェオレでお願い！」

え、と……どう言う事でしょうか何故か比企谷さんが飲み物を買って来る流れになつてしまいました。

「それで、そちらさんは？」

「へ？」

えつとこれって私の分も頼むのがれなのでしょうか？

まあ……はどのようにでもなれと言う事で私はやけくそ気味に頼んだ。

「……それじゃあ激辛麻婆ドリンクで……」

「……なあ今幻聴が聞こえた気がするんだが気のせいかな？」

「気のせいじゃないよ？ エノシンは何時も飲み物はそれしか頼まないもん」

「ちよ、結衣！」

私は顔を真っ赤にしてワタワタしながらも結衣に言う。

そんな中、比企谷さんは引き気味に部屋を出て行きました。

「まあ……これで一先ず気楽に話せるんじゃないかしら？」

「はっ。」

雪ノ下さんの言葉に私は少し疑問に思ったが、比企谷さんが私を気遣って出ていった事を理解出来た。

「あ、えつと……実は私好きな人がいました……」

「そう……それで？」

「その人は周囲と孤立してて話しづらいと言いますか……付き合いたいのですが……い
かんせん接触がしづらくて……」

「あらそう……つまり好きな人と付き合えるように手伝って欲しいと言うのがあなたの
頼みでいいかしら？」

「あ、いえ正確には彼と話を出来るきつかけや場の提供をお願いしたいのです。後は自
分なりに努力するつもりです」

「そう……それじゃあ参考に聞くけどその子の名前を教えて貰えるかしら？」

「あ、はい名前は材木座義輝と言う人です……」

「……分かったわその依頼、奉仕部が引き受けましょう」

「へ？ あ、はい!?! ありがとうございます?」

私はすぐ様首を傾げるがすぐ様そう返事を返す。

そしてしばらくして比企谷さんが帰ってきました。

「で、依頼は何だったの?」

「彼女が片思い中の相手と接触。後は自分でどうにかするそうよ」

「そうか……なあそれって俺達じゃなくて友人とかに頼めないの?」

比企谷さんのその問い掛けに私は首を軽く横に振る。

「いえ……その人はクラスから孤立していてしかも独創的な言動の目立つ人なので話しかけるのが……」

「あ、何かすまん……」

私が遠い目になってる中、比企谷さんは事情を察したのか謝罪する。

「いえ……気にしないで下さい事情を知らなければそうなるのは当たり前なのですから」

「お、おう……だがそうなるかといつと関わった後、お前に変な噂とか流れるんじゃないか?」

「そ、それは……」

私は彼の言葉に何も言えなくなる。

何故ならそうならないと言う保証は無い、だけど私は彼に自分の気持ちを伝えないと思つた。

「確かに無いという無責任な言葉は言えません。ですがそれは覚悟の上です！ その為ならこの顔に一生消えない傷を付けても良いとすら思っています」

彼は一緒たじろいだがすぐ様私を真剣な眼差しで見詰めてくる。

私はそんな彼から目を離さず真剣に彼の目をみる。

「……ああまあそうだな、信じた訳じゃないがお前が真剣だつて事は分かった。だから、その……あ、あれだ出来るだけ善処はしてみる」

彼は照れ隠しなのか、頭を掻くとそつぽを向いた。

私はそんな彼に思わず頬が緩む。

「ま、それは分かったが……で、相手は誰なんだ」

「2年の材木座義輝さんよ。私も知らない人物なのだけど、比企谷君は心当たりはあるかしら？」

雪ノ下さんがそう応えた瞬間、比企谷さんは一瞬は？ と言つた感じで硬直する。

「は、ははは雪ノ下流石に冗談でも笑えないぞ」

「冗談では言つて無いわよ、現にあなた同様に彼女から名前を聞くまで知らなかったもの。それより貴方のその様子だと知っているようなね？」

「あ、い、いや、あ、アレだ。確かに知つてはいるが、ハッキリ言つてモテる要素が待つたか思い付かないような奴だぞ。むしろ俺同様に邪険に扱われるまである」

そ、そこまで言いますか。確かに材木座さんは暑苦しそうでぽっちやりしてて、言動が可笑しかったりしますけど、そこまで邪険に扱われる程では……いえ確かに世間体から見れば邪険に扱われそうですね。

力説する比企谷さんの話を聞いた雪ノ下さんは頬に手を当てしばらく考えます。

「……あなたがそう言うと言ふ事は、その材木座さんはよほどの問題児なのね。なるほど、確かにそれなら依頼に来た事にも納得が行くわね」

何か変に納得されちゃいましたよ……。

私は思わず苦笑いを浮かべる中、雪ノ下さんは私の方を見る。

「それじゃあ貴方の依頼は、その材木何とかさんとの話し合いの場を提供するでいいわね？」

「アツハイ??後は私個人の力で何とかします」

わたしは雪ノ下さんの問いかけにそう応えようと、雪ノ下さんは私の返答に満足したのか、軽く一回頷いて見せた。

そして、これが私と奉仕部との最初の出会いでした。

まあ。この出会いが、まさか本当に材木座さんと私を結ぶとは、当時の私はおもいも
ありませんでしたか??。

第2話 思い出

昔の私は??ハッキリ言えば根暗で無気力でひたむきな性格の人間でした??。

どれくらい暗かったかと言えば好きな文学作品は人間失格だとか、平気で言える位に鬱屈してたと言えば分かって貰えるでしょうか?

コホン??とにかく私は下手をすると自殺しかねない位に精神面が病んでた訳です。

まあそんなある日??私は教室に明日提出の宿題を忘れてしまい??憂鬱ながらも宿題を出した先生が屈強なまでのムキムキマツチで??人殺ってませんか? ていう位に怖い顔と気迫を持ったリアルでThe 鉄人と言った感じの人だった事もあり??いやいやながら渋々取りに來た訳です。

そしたら教室の中で笑い声が聞こえ??うわ人がいる嫌だなあ??とばかりに中にいる人が立ち去るまでやり過ごす事にしたのです。

それに声の主が生徒同士の間でも典型的なイジメっ子でしたし??関わりたく無かつた事もありました。

それで??一旦立ち去ろうとして私は彼女達が他人の男子が忘れただろうカバンを、探つて偶然にも見つけた原稿用紙をゴミ箱に捨てようぜ的な話を聞いてしまったので

す??。

その後は彼女達が立ち去ったのを見兼ねて荷物を撮って帰ろうとしました??。

そこで多分ここが私にとっての人生の分岐点だったんだと思います。

私はふと彼女達がゴミ箱に捨てた原稿用紙が気になりゴミ箱から取り出したのです。

そして、試しに少しばかり読んでみることにしました。

ハッキリ言って私の感想はこれは酷い一言でした。

文体は滅茶苦茶、展開だってあつちこつち無理矢理と言いますか嫌々御都合主義過ぎるでしよ的な内容??あつちこつち無理に漢字を使つて誤字脱字も多くて読みづらいのなの??。

でも??だからでしょうか??私の心には酷く響く最低最高の作品だったので。

だってあんなに分厚く手書きで必死に字を詰める何て私なら途中で参っちゃう作業ですし、そこまで一つの事に必死に慣れてる事が嫌でも伝わります??内容は酷くてもそれでも不器用ながらに必死に頑張っている??だからこそ私は、そんな作品を書いた此処に居ない彼がとても眩しくて綺麗に見えたのです。

何せ??気が付いたら涙を流してましたからね私??。

とまあ何故そのような話をしたのかと言いますと??実は私、奉仕部の一件から翌日??友人の結衣から分厚い原稿用紙を頂いたんです。

勿論その後には疑問を抱きながら目を通しました。

まあ??そのお陰かすぐさまその原稿が誰が書いたのか理解しました。

だって文体や筆跡が、私が今の私になる切っ掛けとなった作品を書いた人??私の人生に置いて恩人であり現在進行形で片思いの人??。

材木座義輝さんその人の書いたものだったからです??。

しかも当時の作品と見比べたら多少はましになってましたがそれでも誤字脱字が少し減った位でした。

そして私はそんな材木座さんの原稿用紙を、昔の思い出を懐かしみながら読んでいく訳です。

結衣が言うには材木座さんが明日この原稿用紙の感想を聞きに来るらしく、読むの難しくして自分には分からないだろうから、そう言った難しい本とか読んでそうな私にと??まあ正直に言うとは少しばかり呆れましたが??その後、材木座さんと話す場を作る切っ掛けにもなるんじゃないかなと言う言葉を聞いて、一応彼女なりに考えてくれたとばかりに少しばかり感動もしました。

まあ??それが比企谷さんの意見だと直ぐに言われたので全部台無しだった訳ですが??。

まあ??とは言え教えて下さったのは感謝です。

それに、たしかに結衣さんでは材木座さんの書いた作品と言いますかこれは確かに読みづらいでしょう??真剣に読むと間違いなく徹夜コースに成りかねない程分厚いですし、改行も少ないためか余計に読みづらいですし。

まあそれでも私にとつては最高最低の作品なのは変わりません。

何せこれのおかげで今の私がいると言つても言い訳ですし??コレのおかげで目指したい将来の夢の目標が付いたのですから。

「あ、そうだついでに材木座さんの原稿も返却しましょう」

私はクローゼットにしまつてある材木座さんの原稿用紙を取り出します。

実はあの後、材木座さんの鞆に戻そうとも思つたのですが??見回りの先生が来てしまった事もあり、つい持つて帰つてしまつたんですよね??。

その後、幾度か返そうと思つたのですが返すタイミングが掴めなかつたと言いますか??時間が経過するに連れて材木座さんの所に運ぶ足がどんどん重くなると言いますか??むしろ逆に返しづらくなつてしまひ??。

そんでしまひには思い出の品として何度も気付いたら読み返していて、そのお恥ずかしくて??。

とまあ??どうせお会いするならこれも何かの縁ですし、今回こそはこの原稿をお返ししましょう??そうですね??後は長い事返却出来なかつたお詫びも兼ねて、次いでに部活

の合間で製作したコレも一緒に持って行きましょう?？」。

私はそう思いそれらを鞆にしまう。

「ふふっ材木座さん??喜んでくれるといいなあ?？」

私は楽しげに目を細めて微笑みながら、机の上に置いてある材木座さんの原稿に再び目を通すのでした。

第3話 待ち合わせ

私は現在、奉仕部の入口である扉の前にいる。

と言うのも結衣さんのはからいで、八幡さんとお会いした後、何故か八幡さんから奉仕部の入口で待機するようにと言われたからです。

それについては八幡さんが言うには、材木座さんは人見知りが激しく、得に初対面の女性には視線すら合わせられないらしいです。

その為、最初は自分達が材木座さんに感想を言った後、しばらくしてから結衣さんにもメールやL I O E、を通して呼び出し、その後は入口の前で待機して欲しいとの事でした。

とりあえずその時の私は、結構詳しいんですねと、感心したように言ったのだが、彼は奉仕部に最初に依頼しに来た時の様子や態度を見てたら嫌でも分かるとか言っていました。

とまあ??そんなこんなで結衣さんからL O N Eを受け取った私は入口の前にいる訳です。

「さて、では感想を聞かせてもらおうとするか」

奉仕部の教室から聞こえる私が好きの人、材木座さんの声。

「ごめんなさい。私にはこういうのよく分からないのだけど?」

「構わぬ。凡俗の意見も聞きたいところだったのな。好きに言ってくれたまえ」

そして、雪ノ下さんがそうと一言呟いたのを耳にして少し間が空き――

「つまらなかつた。読むのが苦痛ですらあつたわ。想像を絶するつまらなさ」

「げふう!」

私は部屋の中で起きているだろう状況を想像しながら、思わず苦笑いを浮かべる。

いや??確かに材木座さんの作品は、色々どこれは酷いといった出来栄えですから、完全に否定は出来ないのですが、まあ??ストリート過ぎだと思つたと言いますか??少しばかりオブラートに包んであげても良いのではと思つたのですよ??。

「ふ、ふむ?。さ、参考までにどの辺がつまらなかつたのかご教示願えるかな」

材木座さんは自らの勇気を出して自ら地雷原へと足を踏み入れる。

私なら最初の心が完全にへし折れてるのに彼はめげずに前向きに聞こうとする所は、本当に頑張れる人なのだど改めて実感が出来て嬉しくもあるが、今回ばかりはそれが不運にも悲劇の火蓋を開く結果となつた。

そこからは本当に悲惨だつた。なにせ雪ノ下さんは見事に丁重に駄目な所をことごとく細かに説明していく??私はもはや心の底から辞めて! 材木座さんのライフはも

う〇よ！ と叫びたい気持ちにすらなる程に余りにも悲惨だった。

「その辺でいいんじゃないか。あんまりいっぺんに言ってもあれだし」

比企谷さんがそんな中で何とかフォローを入れる。対して雪ノ下さんはまだまだ言い足りないとか怖い事を呟く中??由比ヶ浜さんにバトンタッチをする。

「え、えーと??む、難しい言葉をたくさん知ってるね」

「ひでぶっ!」

その後は悲惨と言って良い??由比ヶ浜さんは??普段は良くも悪くも真つ白な子だからか案の定、適当な感想と言いますか??作家志望の材木座さんに見事な会心の一撃??そして慌てて由比ヶ浜さんは投げやりに八幡さんへバトンタッチした。

「ぐ、ぐぬう。は、八幡。お前なら理解できるな? 我の描いた世界、ライトノベルの地平線がお前にはわかるよな? 具物どもでは誰一人理解することができぬ深淵なる物語が」

材木座さんはもはや蜘蛛の糸に縋る勢いで、八幡さんにそう言う、そして??。

「で、あれって何の Pakuri?」

おもいつきりとどめを刺しました??その後、教室内では物凄い物音が響き、やがて静まり変える中、二人はドン引いたような言葉を口にする。

私から言わせたら??雪ノ下さんも由比ヶ浜さんも変わらないんだけどなあ??。私は

そんな事をおもしながら少し遠い目になった。

「まあ、大事なものはイラストだから。中身なんてあんまり気にすんな?！」

八幡さんはそう締めくくるとしばらくして、雪ノ下が口を開いた。

「そうね?!それに今回はまだ?!最後の読者が残ってもいるしね?!」

そして、入って来なさいと言う声に私は一瞬、驚く中?!私は恐る恐る扉を開き中に入るのだった。